

館林キリスト教会 デボーションノート (2024年)

1月1日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 17:12~18
「大淫婦への裁き」

「多くの水の上にはすわっている大淫婦」(17章1節)の水とは「あらゆる民族、群集、国民、国語である」(15節)と説明され、あらゆる民族や国民を支配していることを示しています。大淫婦を乗せていた獣と十の角は、今度は、淫婦を憎み火で焼き尽くすようになります。それまで女と獣は一致協力して神様に反逆して栄華を誇っていましたが分裂を起こしました。大淫婦はこのようにして裁かれ、神様のご計画が成就する時まで、神様は大淫婦の支配権を獣にお与えになるのです。やがて神様がすべてを裁かれるときには獣も滅ぼされ、すべての支配権は神様に帰されるのです。「女」は「地の王たちを支配する大いなる都」(18節)のことで、大バビロンは大帝国ローマに代表される地上の支配権の象徴ですが、ローマ帝国や従属する国々も滅び行き、終わりの時の反キリストもまた滅び行くのです。

1月2日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 18:1~7
「バビロン滅亡の宣言」

17章で述べられた「大いなる都」の滅亡は、18章において、いっそう詳細に展開されています。まずヨハネが見たのは、天から降りて来る御使いでした。そしてこの御使いが「大いなるバビロンは倒れた」と宣言したのです。この世こそ「悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣」(2節)です。この世と戯れ、この世によって富を得た者たちは、今やこの世と共に裁かれる時が来たのです。4節には、まず神の民が「彼女から離れ去る」ように命じられています。かつてパウロも「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」(Ⅱコリント6:17)と勧めました。私たちはこの世の醜い危険な状態を見破り、これに対して毅然とした態度をとっていくべきです。この世は神様に逆らい続けて来ました。だから、いまや天にまで積み上げられた罪悪が倍して報いられる時が来たのです。

1月3日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 18:8~18
「王や商人達の嘆き」

さばきをもたらす「主なる神は、力強い方なのである」(8節)。その傲慢な態度、悲しみを知らないと言った都も、様々な災害に襲われ、たちまち火で焼かれてしまいました。ローマと結びつき、その悪に加担し、「ぜいたくをほしいままにしていた地の王たち」(9節)は、その状態を見て、嘆いています。王たちは、ローマが「焼かれる火の煙を見て」(9節)、近づくことも出来ず、悲しみと恐れに立ちすくんでいるのです。王たちに続いて、「地の商人たち」(11節)も、ローマの陥落を泣き悲しんでいます。ローマと通商が成り立たなくなったからです。彼らの嘆きは、ローマ自身のためではなく、自分たちの顧客を失

ったことによるものです。世の商売の世界、また一切の経済的力があがめられるところで、しばしばそういう冷酷な打算的な嘆きがあるのは、昔も今も同じです。

1月4日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 18：19～24
「完全な滅亡」

ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ち上げ、それを海に投げ込みました。石は大きな水しぶきをあげながら一瞬のうちに深い海に沈みました。再びこの石を目にすることはありませんでした。このように、大いなる都バビロンは「激しく打ち倒され、全く姿を消してしまう。」(21節)のです。大バビロンの繁栄をもたらした商人たちは物質的誘惑を持って人々を惑わしました。周囲の国の民はこの都の悪の影響を受けて神を恐れることを忘れ物質的享樂のみを求めようになってしまいました。バビロン滅亡のもう一つの理由は「預言者や聖徒の血、さらに地上で殺されたすべての者の血が、この都で流されたからである」(24節)ということです。これはローマの迫害と流血を意味していると同時に、地上のあらゆる反キリスト的な勢力による迫害を意味していると考えられるようです。

1月5日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 19：1～8
「勝利の賛美」

大淫婦バビロンは滅ぼされ天では勝利の賛美が歌われました。詩篇などに「ハレルヤ(神を賛美せよ)」という言葉が出てきますが、新約聖書では黙示録19章にだけ出てくるそうです。「ハレルヤ」と歌う理由は「救いと栄光と力とは、われらの神のものであり、そのさばきは、真実で正しい」(1,2節)からです。神様は、聖徒たちの血を流した者たちに対して、正しい裁きを行われます。6節の「大群衆の声」とはすべての時代にあたる、全世界の信仰者たちの声だと考えられ、彼らが一斉に神様を賛美する声は大水の音のように、激しい雷鳴のように響き渡るのです。ここに「神の国」が建てられ神様が王となられるのです。7節には「小羊の婚姻の時がきて」とあります。キリストは十字架の血によって聖徒たちを贖ってくださいました。エペソ人への手紙には結婚が象徴的にキリストと教会を指すことが記されています。

1月6日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 19：9～16
「再臨の主イエス」

イエス様は、十字架にかかり、墓に葬られ、復活されて後40日を経て、オリーブ山から弟子たちの見ている前で、雲に迎えられ、昇天しました。その後ヨハネはパトモス島にて、このイエス様が御使いの予告のように天が再び開かれて現われるのを見たのです。イエス様は勝利の王として白い馬に乗り、炎のような目を持ち、多くの冠をかぶり、血に染まった衣を着、天の軍勢を引き連れて君臨されました。「白い馬」(11節)とは、勝利と純潔を象徴します。また「忠実で真実な者」(11節)という呼び名は、イエス様のご性格を表しています。この再臨のイエス様に対して、この世の王、国家、支配者たちがどんな

に力をもっている、武装している、新兵器を開発している、ご再臨の主イエス様に立ち向かうことは出来ません。なぜならイエス様こそ、全世界の、全歴史の中の、「王の王、主の主」（16節）であられるからです。

1月7日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 19：17～21
「最後の戦い」

ヨハネは、太陽の輝きの中に御使いが立っているのを見せられました。それは目もくらむ光と威厳に包まれた光景だったと思います。すると御使いは大声で「さあ、神の大宴会に集まってこい」（17節）と告げられました。それは戦慄すべき、死肉を食う鳥たちの宴でした。イエス様ご自身がオリーブ山で、人の子の再臨について語られた時、「死体のあるところには、はげたかが集まるものである。」（マタイ24：28）と言われたのを思い出します。御使いが「中空を飛んでいるすべての鳥にむかって」（17節）叫ばれたのは、最後の戦いの前の時です。つまり戦わずして、すでに神様に敵対する者は、「王であれ、将軍であれ、勇者であれ、また自由人、奴隷」の区別なく、すべて打ち負かされることが明らかにされているのです。神様の前には、地上の歴史の中で強大に見えた獣の力でさえ、実は敵対することができないのです。

1月8日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 20：1～6
「千年王国」

ヨハネは、ひとりの御使が底知れぬ所のかぎと大きな鎖を持って天から降りてくるのを見ました。「底知れぬ所」（1節）とは千年の間悪魔を閉じ込めておく場所です。悪魔について悪魔、サタン、龍、年を経たへび（2節）と、いろいろな言われています。いつの時代も悪魔は巧妙に惑わすものです。ペテロの第一の手紙5章8節、9節の教えの通りです。しかし悪魔を閉じ込めておくので、この千年の間は、だれも悪魔に惑わされないのです。その後悪魔はしばらくの間解放されることになっていますが最後には火と硫黄の池に投げ込まれてしまうのです。千年王国の特権に与るのはキリストによって救われた人々で、第一の復活に与り、キリストと共に千年の間治めるのです。第一の死はだれもが迎える肉体の死で、第二の死はキリストを信じない人々の永遠の死をさします。

1月9日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 20：7～15
「最後の審判」

千年の期間が終わると、悪魔は「地の四方にいる諸国民」すなわちゴグ、マゴグを惑わします。海の砂のような数え切れない人々が戦いに集まります。黙示録16章のハルマゲドンの戦いよりも大規模です。しかし本格的な戦い以前に、神様の御力によって焼き尽くされてしまいます。諸国民を惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれます。そこは世々限りなく日夜、苦しめられる場所です。さて、古い天と地は消え去り、大きな白い御座にいますかたがおられ、死んだ者たちはひとり残らず御座の前に立ちます。海難事故などの死亡者は海から出て御座の前に立つのです。かずかずの書物が開かれそこに書かれた各自の行いに応じて裁かれます。「いのちの書」にはキリストの救いに与った人々の名前が

記されています。猶予が与えられている今のうちに永遠の命をいただくために、あなたもキリストを信じて「いのちの書」に名前を記して頂かなければなりません。

1月10日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 21:1~8

「神が人と共に住む」

ヨハネはここに、神様の新しい創造と、聖なる都、およびそこに住む人について記しています。歴史の終わり、今の時代の終末は、無に帰してしまうのではなく、新しい世界の始まりとなるというのです。かつて旧約時代にエジプトを脱出した、イスラエルの人たちは、40年にわたって苦しい荒野の生活を続けました。その時、彼らを支えたのは、人々の真ん中に建てられた神の幕屋でした。彼らは神の幕屋を見る時、神のご臨在を知って喜びと平安を得たのです。ところが今や、私たちはイエス様と一緒にあり、じかに神様と顔と顔を合わせて相見ることが出来るのです。しかも私たちは、愛するイエス様の花嫁となり、永遠に、別れも死もなく、すべてのクリスチャンたちと本当の兄弟姉妹として共に生き続けることが出来るのです。

1月11日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 21:9~17

「新しいエルサレム」

黙示録21章9節から22章5節までは、21章2節から4節の内容を少し具体的に展開しているように見えます。17章1節では、大淫婦であるバビロンの審判を見せていますが、ここでは小羊の伴侶である花嫁を見せています。黙示録17章では、大淫婦がこの地上の美しいものをもって飾っている有様を見せられます。しかし、それはことごとく地のものであり、外形的な虚飾で、内側は自分の姦淫の汚れで満ちていました。それに比べて新しいエルサレムは天的なもので飾られています。11節に「ようであり」と象徴的に繰り返えされているのは、それが宝石以上に素晴らしかったからでしょう。この聖都エルサレムについて、「12」の数が繰り返されています。「12」は神の民にとって特別な完全数で、ここで使われているのは神様が始められたみわざがここに完全になされたことを象徴的に表しているのです。

1月12日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 21:18~27

「聖都にないもの」

さまざまな宝石によって表されている都の様子は神様の栄光の輝きを比喩的に表していると思われれます。この聖なる都には神様のご臨在なさり、神様の栄光が輝いています。この聖なる都にないものは、「聖所」です(22節)。聖所は神様を礼拝する場所です。すなわち、私たちの時代の言葉で言えば、教会がありません。なぜなら神様と小羊がおいでになって、都全体が聖所のように、教会のようだからです。また「日」や「月」が照らす必要もありません。なぜなら神様の栄光が輝き、小羊が都のあかりだからです(23節)。「夜」がありません(25節)。「罪」もありません。キリストを信じて罪許され「小羊のいのちの書」に名前を記された人だけがここにはいれるのです。そして「諸国民は

都の光の中を歩き」(24節)とあるように、民族の区別なくすべての救われた民が神様の光の中を歩み共に主を賛美するのです。

1月13日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 22:1~7

「預言の言葉を守る者」

さらにこの聖なる都には「水晶のように輝いているいのちの水の川」があります(1節)。また「いのちの木」があつて12種の実を結び、その実は毎月みられます(2節)。ヨハネは、これらを見せていただきました。そして「これらの言葉は信ずべきであり、まことである。」こと。これらは「すぐにも起こるべきこと」であり、「見よ、わたしは、すぐに来る」というお言葉のように、主はお約束どおりおいでくださることが明記されています。「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行を遅くしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔い改めに至ることを望み、…ながく忍耐しておられるのである」ペテロの第二の手紙3章9節。ですから主の時まで、信仰によってみ言葉を心に受け入れ、信じ従わせていただくことが大切です。

1月14日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 22:6~11

「時が近づいている」

神様による最後の審判、この世の終わりが刻一刻と近づいているのに、その備えを全くしようとしめない人々に対して、神様は御使いを通して、「これらの言葉は信ずべきであり、まことである」(6節)、「見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである」(7節)と、最後通告をしています。旧約聖書に書いてあるとおり、ノアの洪水の時、その地にはたくさんの人々が住んでいたにもかかわらず、神様の言葉を信じてその備えをしたのはノアの家族8人だけでした。また、ロトの時代、神様がソドムの町を滅ぼすと警告された時、ロトの婿たちは、それをロトの冗談としか受け止めず、ソドムの町と共に永遠に滅ぼされてしまいました。だから私たちはこの教訓を生かし「この書の預言の言葉を封じてはならない」(10節)と言われる主の御声に従って、主イエス様が来られるまで、キリストの福音をこの町の隅々にまで伝えていきましょう。

1月15日 今日に通読箇所 ヨハネの黙示録 22:12~21

「きたりませ主よ」

「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』」(17節)。これは御霊と花嫁である教会の叫びです。主の花嫁である教会は、御霊様と共に、その愛する主イエス様に対して「きたりませ」と叫びます。それと共に教会は、人類の運命を決定する終末の時が来る前に、渴いている者に対して命の水の源泉である主イエス様のもとに「きたりませ」と叫ぶのです。砂漠を旅行する隊商らは、渴いて死に瀕することがあるそうです。このような場合、八方に手分けして水を捜し始めます。もしその中の誰かが水を見つけると、大声で「水がある、来たれ」と叫びます。この声が荒れ果てた砂漠の中に響き渡るのは何ともいえない喜びだそうです。主イエス様は最後に「しかり、わたしはすぐに来る」(20節)と

言われます。この時、全ての約束は成就し、救いは完成し、全ての悪は滅ぼされます。「アーメン、主イエスよ、きたりませ」(20節)、これがこの書の結末の言葉です。

1月16日 今日に通読箇所 創世記1：1～19
「天地創造」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU011.mp3>

神様が天地宇宙を創造された時、それを見ていた人はいない。それを報告する人も、情報を伝える人もいない。それができるのは神様だけである。また、その情報のスタイルを決めるのも、神様の自由だ。同じ理由で、この記事に関する人間の傍証はない。これが、創世記、1章を読む根本的な心構えだ。この章の表現は昔の人にも分かりやすかったろう。また暗記、朗読に適したスタイルだから、家族礼拝や集団礼拝で、交読をしたかもしれない。これは神を信じる者の、基本的信仰告白だったのだ。それゆえに、まだ文字が一般的でない時代にも、原文は正しく保存されたと思う。これから続いて、創世記を交読して行きましょう。

1月17日 今日に通読箇所 創世記1：20～31
「人間の創造」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU012.mp3>

ダーウインは進化論で「人間の先祖は猿だ」と言ったという（実際はそんなことは言わない）。しかしここには「人間は神によって、神の形に創造された」とある。人間観の根本に大きな差異がある事が分かる。そして神は人間を祝福された。全ての生き物を管理するように。また人間のために地球をお与えになったが、まだ素材的だった地球を、人間の知恵によってますます開発するように、ご計画になった。また自然の果実を自由に食べることをお許しになった。人間は、人間自身も、神の供給も、祝福も、期待も、全て完全な状態に創造されたのだった。彼らが墮落するまでは。

1月18日 今日に通読箇所 創世記2：1～17
「エデンの園」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU021.mp3>

(1章から2：4節)までは、地球規模で記された天地創造の記事だ。(2：5節)以降は、局地的に描かれた同じ記事だと思う。神は土の塵、即ち地球上の物質で、人の体を作られた。また神の霊を吹き入れたので、彼は霊的な生き物となったと記されている。ここに彼は物質の世界とかかわりつつ、しかも神様との交わりができる、人間の本質が語られている。またそこは「エデン」だった。ノアの洪水以来、世界の様子も変わったそうだから良く分からないが、四つの川の水源地(たぶん高地)だと紹介されている。そのうち二つ、ユフラテ、ギホン(ナイル川の古い名前)はいまもはっきり地図上に指摘できる川で、これは聖書に出てくる最初の地理と言っても良い。

1月19日 今日の通読箇所 創世記2：18～25

「アダムとエバ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU022.mp3>

神はアダムに、すべての生物を見せ、命名させた。「名前を付ける」ということは「認識と管理」の始めだ。先のお言葉のように、アダムは地球の管理を任されたのだ。次は、最初の夫婦、アダムとエバが創造された話で、これも神の選ばれた文体によって記されている。ある人は言う。「結婚については『神を待て』と勧める。アダムの眠る間に、神は最良の妻を与えた」と。またこの話は、夫婦生活の基本を示す。肋骨は足の骨ではないから、妻は夫に踏みつけられるはずではない。また頭の骨ではないから、夫に向かって威張るはずではない。愛の器官と言われる心臓に最も近い肋骨は、互いに愛しつつ、また肋骨のように夫を支え、助け、仕えるのが、妻の役目だということを教えるのだ。群馬県の奥さんどうです？

1月20日 今日の通読箇所 創世記3：1～13

「禁止事項」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU031.mp3>

運転者の自由に動くのが自動車の魅力だ。便利な代わりには間違えば事故になる。子供が乗る遊園地の自動車は事故がない。そのかわり自由には動かず自動車の仲間ではない。意志がなく、選択もなく、ただただ服従する人の愛情は、その本心を確かめにくい。自由に選択できる人が、選択の結果として愛してくれるのが、お互いに嬉しいのだ。実を自由に食べられる多くの木の中に「食べてはならない」一本の木が置かれたのは、神の御心であり、自由と選択と言うあらゆる場面の人間の価値の原則を示すのだ。我々の生活にもこの木がある。

1月21日 今日の通読箇所 創世記3：13～24

「原福音」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU032.mp3>

この箇所は昔から「原福音」と呼ばれる。禁断の木の実を食べるように誘惑したへび、これに従って食べたアダム夫婦。神は彼らに宣告を与えたのだ。今後アダムは生活のための苦勞、エバは出産の苦痛を知らなければならない。楽園の生活は終わった。しかしこれらの苦勞の間に砕かれた彼らは神を求めるだろう。その時のために、神はキリストによる救いを用意して下さる。(15節) いったい彼らは、この背逆によって即死する筈であった。しかし神はそれを猶予して、自製の、不完全ないちじくの葉のカヴァーの代わりに、子羊の皮を用意して下さった。彼らは子羊の身代わりの死を初めて見た。これもキリストの救いの象徴だ。

1月22日 今日の通読箇所 創世記4：1～16

「カインとアベル」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU041.mp3>

アダム夫妻に子供らが生まれた。夫妻は自分たちの苦い経験と、神の愛のご配慮について、子供たちに良く話したろう。この頃にはすでに、多くの子供が生まれ、カインとアベルはそれぞれのグループのリーダーだったろう。そして二人はグループを代表して公式の礼拝を行った。アベルは両親の教えに従い、悔い改めと信仰をもって、犠牲の子羊を捧げたが、これはキリストの十字架を予告するものだ。しかしカインは、畑の産物を捧げた。彼はだんだん「神も人間のように、上等な食物の供え物を欲しがる」そう思い始めたので、よく選んだ農産物を捧げたのだ。これは礼拝と供え物に関する大きな履き違えだ。ゆえに神は、カインの供え物をお受けにならなかった。

1月23日 今日に通読箇所 創世記4：8～16

「カインの追放」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU042.mp3>

カインはアベルを殺した。羊飼いのアベル一族は多分復讐を考えるだろう。「復讐」「仇討ち」は、警察のない昔には社会秩序を維持する方法だった。しかしまだ人口の希薄なその頃、報復は血が血を呼び、恐ろしい混乱になるだろう。神はそれを避けるため「復讐」を禁じ、カインを東方の荒野に放逐し、この二つのグループを隔離された。同時にこれはカインの悔い改めのための猶予でもあった。この後世界は、カイン系とアベル系に分かれ、それぞれの地域で、次第に繁殖した。またそれぞれの特徴をもった、文化文明を生み出した。アベル系とカイン系の、それぞれの文化の性格は何か？それは（17節）以下に出ている。

1月24日 今日に通読箇所 創世記4：17～26

「カインの文化」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU043.mp3>

以下には「カイン系」の子孫に発達した文化が書いてある。彼らは遊牧民として力を拡大して行った。有力者に多妻の習慣が起こった。女性は美しいというだけで尊重された。音楽も始まった。刃物、武器の制作も始まった。レメクの歌は「多妻、暴力、復讐」を誇る歌であることが分かる。事実彼は、女出入りで青年を殺したらしい。しかも「自分の復讐は神の復讐以上だ」と、うそぶいている。一方、アベルの弟セツによって指導されたアベル系の人たちは、「アベル殺人事件」のショックから立ち直り、こぞって主の御名を呼び、公式の礼拝と祈りが復活したのだ。このコントラストは厳粛だ。このようにして、創世記の歴史は進む。このコントラストを含みながら。

1月25日 今日に通読箇所 創世記5：1～14

「系図」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU051.mp3>

ここに「アダムの系図」とあるが、「系図」はヘブル語で「トーレドース」と言

う。系図でもあり、伝記でもあり、年代記、すなわち歴史でもある。実は創世記は10個のトーレドースで成り立っている。すでに2章4節までが「天地創造のトーレドース（由来）である」と記されている。5章以下は「アダムのトーレドース」になる訳だ。思うに先祖たちは、系図とともに出来事をも記して（文字でなく口承の場合もある）子孫に伝えたのであろう。これが保存され、神の導きのうちに、著者モーセによって、創世記の内容になったかと考えられる。言わば「トーレドース集」だが、もちろんこれには難しい問題も含まれているが。

1月26日 今日に通読箇所 創世記5：15～32
「聖徒エノク」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU052.mp3>

この章で驚くのは、先祖たちの長寿である。いろいろな解釈もあるが、多分まだ気候その他の生活条件が良かったのだろう。しかしアダムに与えられた宣告は厳しく「そして彼は死んだ」という記述が重なっている。ここにエノクと言う人物が出てくる。彼は300年の長い間、雨の日も風の日も、神とともに歩んだ。そして最後は死を見ずして天国に行ったと書いてある。ヘブル書には「彼は生涯、神に喜ばれていることを証しされた」とも書いてある。すばらしい聖徒だ。ある人は言う。「いつものようにエノクは、神様と一緒に散歩に出ました。その散歩があまり楽しかったので、家に帰りませんでした。そのまま天国まで、神様と一緒に歩きました」と。羨ましい話だ。

1月27日 今日に通読箇所 創世記6：1～8
「洪水の前」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU061.mp3>

ここに「神の子」「人の娘たち」とあるが、難解で議論の多い所だ。わたしは「セツ系と、カイン系の間に混交が始まったのだ」と考える。カイン系の娘たちが、よりおしゃれで魅力的だったことは察しがつく。また彼らのなかには「ネピリム」のような、巨人、圧制者が多かった。そのために、この二つの種族は混交してしまった。クリスチャンの世に対する関係も似ている。もしこのような混交があれば「悪貨は良貨を駆逐する」道理で、クリスチャンの信仰の方が害われる。もちろん我々は「世から出る」わけではない。しかし大切な部分は、この世と一線を引く覚悟が肝要なのだ。

1月28日 今日に通読箇所 創世記6：9～22
「洪水の予告」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU062.mp3>

ここに「ノアの系図（トーレドース）」とあって、ここからノア一族の物語。同時に「ノアの洪水」の物語が始まる。セム系の人々とカイン系の人々が一緒に生活するようになって、世界はこんとんとした墮落におちいり、もはや收拾のつかない状態となった。いまや神は洪水をもって世界を滅ぼすことを決められ

た。ここに「神は人を造ったのを悔いた」とあるが、これは人間の「悔い」とは違う。神に対する人間の態度が変化した結果、神は悲しい思いで「人間に対する対応を換えたもう」ということだ。この場合、すでに人間の方が変わったのに、神の側の変更がなければ、かえって「神自身の変更」と理解されてしまう。

1月29日 今日に通読箇所 創世記7：1～16
「ノアの箱舟」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU071.mp3>

(6章15節)で、箱舟の寸法や設計が命じられた。これは帆柱も舵もなく海上の倉庫のようだ。排水量は4万トンぐらいだろうと言われる。1604年に、オランダ人のピーター・ジャンセンという金持ちの信者が、試みに同じ船を造ってみた。積載量は同じトン数の船に比べて、2/3多く、用途によっては便利なので、同じ型の船を造る人が出て「ノアの箱舟」と呼ばれ、一時期流行したそう。さて神の命令に従って箱舟ができる。海も見えない陸上だから、嘲笑するものが多い。しかしノアは黙々と神の指示に従った。いや実は黙々ではない。人々に箱舟に入り、救いを受けるように熱心に勧めた。だから聖書のある所に、彼は「義の宣伝者」と記されている。

1月30日 今日に通読箇所 創世記7：11～24
「40日の洪水」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU072.mp3>

予定されたものがすべて箱舟に入ると、「主はうしろの戸を閉じられた」とある。不信、不道徳の人々は、ここで「神によって」救いから締め出されたのだ。洪水は全世界に及び、谷や平野だけでなく、すべての高山も水に覆われた。貧困、犯罪などの底辺の谷から、富豪、貴族、王などの高位者、また人間的に尊敬された人格者などの高山も、神の裁きの水に沈んだ。しかし箱舟は浮かんた。箱舟に入ったものは、裁きの水を越えて浮かんた。人の罪がどんなに深くても、神の裁きがどんなに厳粛でも、そのすべてを越えて、安全に平安に、神の救いの箱舟は浮いたのである。これは何とすばらしい、キリストの救いの模型ではないか。キリストは箱舟でなく、今同じように「信仰による救い」に人を招いている。

1月31日 今日に通読箇所 創世記8：1～12
「からすとはと」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/01SOU081.mp3>

箱舟には帆も舵もないから、ただただ大水の上を漂流した。集団的な「行方定めぬ波枕」だった。しかし神様は「ノアと、箱舟にいたすべての生き物に心を止められた」のである。みこころのままに洪水が起こったが、いまみこころのままに風が吹いた。そして水は引き始め、箱舟はアララテ山頂に留まった。ようすを見るため、最初に放ったからすは、屍肉を食べるからか、出たきり帰ら

なかった。はとは足を留める所がないので、すぐ帰ってきた。しばらくしてもう一回はとを放つと、今度はオリーブの若葉、色もあざやかな緑の若葉をくわえて来た。陸地が乾いた証拠だ。オリーブは平和と希望の象徴だ。いまこそノア一族は、たしかに救われたことを実感した。何と言う霊的暗示に富んだ、美しい話だろう。